

保坂高殿著

『ローマ帝政中期の国家と教会』

——キリスト教迫害史研究 一九三三—三二年

豊田浩志

保坂氏の最近の活躍にはほとほと感心する。

(一)『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』教文館、

二〇〇三年十二月、A五判、六〇八頁。これは二〇〇八年

度日本学士院賞受賞対象業績となったもの。

(二)『異教世界とキリスト教(一)、(二)』教文館、二〇〇五

年九、一〇月、B六判。

そして、(三)今回の本書である。

いずれも啓蒙書や一般書の類ではなく、氏の問題関心にそつた粒よりの力作で、それらが二、三年ごとに形をなして公になつて

いるのは、じつに壯観である。もれ承るところでは、(一)と

(三)に続いて、予定三部作の最後、四世紀を対象にした続編がすでに始動中の由。脱帽するのみである。

評
書
(一)を拝読したときの感想を正直に吐露することをお許しいただくなら、失礼かもしれないが、フレーズ「怪童(むしろ快童)現わる」が脳裏をよぎって走った。すでに五十代の氏をとら

えて怪童はなからうが、小粒の論文を重ねていく中でながしかの傾向を押さえるしか能のない評者にとって、網羅的かつ的確に資史料を渉獵し、それを独自の観点から縦横無尽にずいずいと腑分けして、欧米を始めとする諸先達の立論を臆せず評価・批判をくだし、獲得した知識を一挙にすべて書き下ろしてゆく氏の手際は驚異的、いなむしろ快感ですらあった。松本宣郎氏に誘われての二〇〇五年一月の西洋史研究会大会(青山学院大学)共通論題報告「三、四世紀のキリスト教迫害」(四世紀初頭、キリスト教迫害推進を希求した常民たち)『西洋史研究』新輯第三五号、二〇〇六年、一六九—一八一頁)は、氏の迫害史研究登場への評者なりの祝砲であった。そして(三)の登場である。さしずめ「千年の知己を待つ」とふて寝を決め込んでいたイノシシが、不意打ちで狩り立てられた心境といえはいいのだろうか。

以下、拙いながら本書論旨の簡単なまとめを試み、そのあとで心中去来した疑問点に触れ、最後に若干の苦言を呈して、荷の勝つた評者の任を果たすことに代えたい。もとより大部で内容豊富な本書である。言及し論じたい争点はそれこそ目白押しといつて過言でないが、個別論に入つて逐一触れる余裕はない。また、アクセントの強弱にすぎない所を掘り返して、著者には不本意に感じられるかもしれない。始めにお断りしておく。

* * *

本書はじつにゆき届いた配慮を随所で發揮している。総頁数六六〇の大著なので、最初に全体像を提示する「序論」(三〇頁)を置き、各論の五章からなる本論(四六〇頁)、それに「終章」

と「結論と展望」(計三〇頁)でその後への見通しを示したのち、重要史料の翻訳を掲載した「付録」、ウェブサイトを含めての引用参考文献、事項・欧語索引、出典索引が、それぞれほぼ三〇頁付されている。地図や年表、表も随所に配置され、読者の理解を助ける手立てにこと欠くことがない。これ以上考えられないほどの気配りである。

「序論」での叙述はきわめて明確で説得的に読者に迫るだろう。迫害前期の原著(一)で氏がすぐれた現実感覚と詳細な論証で立証に成功した「迫害は司法措置としてではなく行政措置として捉えるべき」を前提に、はやくも冒頭二頁目で、三世紀になって、帝国の対教会対処法が「訴訟担当公職者の個人的裁量」から「最終的に供儀強制の一点」へと収斂・着地し、他方で教会は殉教者・告白者称号制定を基軸として供儀拒否の行動方針を採用、結果、帝国と正面から対決することになった(二〇頁)、と本書の核心をなす独自仮説「第一仮説」と以下略称」を提示している。

その後、これまでの迫害史研究を概観し、研究者がとらわれてきた問題点を順次指摘してゆく。なかでも氏がくり返し力説するのは、研究の肝心な部分で「史資料には記されていない」「外から持ち込まれた構図、あるいは固定観念のもと」で研究が「進められてきたため、史資料の精緻な分析解説」がおろそかになっていった点で(二二頁)、史料精査による氏の到達結論として、これまで迫害実施のためと考えられてきた皇帝告示は、じつは「民衆の暴力行使を抑制するために事後的に発令された」ものにすぎない、というこれまでの学説を根底からひっくり返す、きわめて意欲的かつ刺激的な第二の独自仮説「以下、第二仮説」が提出される

(二三頁)。

こうして著名な研究者を含め陥ってきた観念性、彼らの犯してきた初歩的誤謬とそのメカニズムを容赦なく列挙した後、あるべき研究進展のための処方箋として、ラクタンティウスやエウゼビオスら教会側史料の読み込み方の、こつ、の伝授に及ぶ。「言葉ではなく行為に着目して行為から思惟を論理的に推論すればいい」(四一頁以下)。これはその通りだと評者も思う。そして氏が狙いすまして挙げる事例は「腸下不調事件」である。氏によると、この証言は異教文献に平行記事が皆無なので事実でなく、教会内で共有されていた「教会側民間伝承」の受け売りにすぎない。文献研究の作業に慣れ親しんだ者にとって「かのラクタンティウス証言に接して直感的に歴史的信憑性のない教会伝承だと理解でき、それを見破るのは簡単だが、この作業にうとい歴史畑や教会史家はまんまと教会著述家の論旨に乗せられてきた、と(三五頁)。

またこの文脈で、大迫害の直接原因こそ追求すべき中心論題と位置づけて著者が評価する先行研究者は、ヤコブ・ブルクハルトとそのわずかな追従者のみで、その中にエウゼビオス史料重視派の評者も含まれ、こと「序文」中に限ったことであるが過分なお褒めにあずかっている。とはいえ、本論中で拙論は全面的批判の対象となっていて、私論の至らなさを教えられ修正すべき点多々ご指摘いただいたと思う半面、保坂説には、その意図は理解できても各論については反論したい件もある。だが、相互に連携し血肉化している著者の認識を、虫眼鏡で断片的にあら探しても意味あるとは思えない。全体構造をどの視角から捉えるのが一

番核心的かつ明快かこそが、重要である。その線での論評を後段でわずかだが試みよう。

続いて、本論部分の構成も著者自身が的確にまとめられているので（四七―四九頁）、多言を費やす必要はない。ちなみに各章の表題は以下である。

第一章「迫害史における相互授受思想 (To and Fro) とその展開」、第二章「帝国の基本思想——紀元二六二年まで——」、第三章「殉教者称号の成立に見る帝国と教会の確執」、第四章「教会の基本姿勢と内部事情」、第五章「大迫害とその帰結」。第一、二章では帝国側、第三、四章では教会側の基本姿勢が検討され、結論として先の第一仮説と第二仮説が導き出され、第五章での大迫害勃発原因論へと収斂していく。立論がなにより秀逸で明快なのは、国家と教会にとって共に本質にかかわる「供儀」を史料批判からあぶり出し、両者共通の土俵に設定して論じている点である。

こうして、「序論」の読者はこれで本書の筋を明確に知ることが出来る。以下続く膨大な本論は細かい論証部分である。読者は「序論」の筋を押さえながら読んでいけばいい。じつにありがたいのだが、全編を再読再々読するうちにある危惧にとらわれてしまった。著者の親切が仇になり、本書は「序論」のみの読まれざる古典になりかねない、誤解を恐れぬ歯切れのよさが著者の持ち味なのだが、それだけに細やかな修正や例外の指摘が吹き飛んでしまいかねない、と。

* * *

保坂氏は、教会側史料の傾向性を指摘し史料批判の必要性を繰

り返している。その言はよしとしても、具体的な場面で状況をどう把握するかは、研究者の視点や関心で千差万別の結論が提示可能であつて、実際にはそう簡単なことではない。同じ事件をどこで目撃しているかだけで、情報の内容はおのずと違つてくる。後日聞き込んだ噂や見聞などもあるだろう。意図的な歪曲は別にして、真摯な報告者にとつてそれらすべてが事実なのだ。ここで史学概論をするつもりはないが、では真実は確定可能なのかといえば、現代歴史学は「ノー」と答える以外にないだろう。歴史学が神ならぬ人間の判断であるかぎり、真実の確定は諦念すべきである。人間思考は多かれ少なかれ我田引水の罫に囚われる。我々ができるだけ複眼的な視角を堅持しつつ、その中でより核心をつく判断を提示するしかない。この一線を越えると、自論を補強する証言以外は無視ないし軽視する方に走り出す。それを鋭く批判する保坂氏自身が同じ陥穽に囚われまいという保証はない。

二点のみ具体例をあげよう。まず腸ト問題。ラクタンティウス史料が大迫害勃発直前の出来事として特記している事件で、よつて本書の主題に照らしてゆるがせにできないテーマであり、ために「序論」でも言及されていた。その史的事実を葬り去る著者の舌鋒は鋭いが、肝心の「史料批判」（四二四頁以下）には、逐一対論が可能と予想される。たとえば、ウアレリアヌス帝のとき腸トに言及するエウセビオスが、大迫害ではそれに触れようともしない事実こそなぜ注目しないのだろうか。評者には、事態が第一・第二仮説を越えて先に進んでしまった証にみえてしまうのだが。同じ流れなのだろう、氏は宗教における超常現象に対しても「文学的モチーフ」「教会伝承の受容」とごく簡単に切り捨てる。

文献学にとくとく教会側史料べつたりの評者たちを説得するために、それなりの丁寧な言説が展開されてしかるべきではないだろうか。教祖イエスは異教文獻で「無力さだけが強調され」ているとしているが、少なくとも魔術師としてのイエスの能力を認めるユダヤ・ラビ文獻をどう考え、教祖の「無力」を強調する異教側の叙述意図への「史料批判」はしなくていいのか、恣意的すぎるのではと抗弁したくもなる（四二七頁註二三など）、異教側の多様性への目配りも確かにされてはいるのだが、力点は自ずとそちらにはない。逆に、ちまたの「嬰兒殺害・人身嗜食・近親相姦」の噂は誤解による風聞とあっさりきれいな事で解説されるのだが（三七頁）、ユステイノスの重たい受け取り方（『第一護教論』第二十六章第七節。ミヌキウス・フェリックス『オクタウィウス』第九章第六節、第三章第一―二節も参照のこと）からすると、広い意味での「キリスト教徒」の一部でそれらが実際に行われていた可能性を完全に払拭することはできない、との立場に評者は立たざるをえない。こういった「史料批判」は不要なのだろうか。しかし、宗教現象とは人間本性に抜きがたく深く根ざした複雑さを含めての救済行動であって、現実には研究者の貧弱な想像力や美学をはるかに越えていたとするほうが真実に近いのではなからうか。我々が探求すべきなのは現実そのものであって、学界に受けのいいわけ知り顔の繕った体裁ではない（はずだ）。この点で著者は我らの同志のはずなのである。

第二に、本書の二大仮説について。幾度か通読するうちに沈黙した思いに触れたい。そもそも第一仮説と第二仮説は相反しはしないだろうか。供儀対立と民衆暴力抑制は常に両立しうるのだろうか。

うか。もちろんする場合もあるだろう。しかし国家としては供儀への妥協を教会に促すために、さりげなく民衆暴力を策動するほうがむしろ洗練された高度な政治手法に思える。また序論では第二仮説が第五章にも及ぶ文脈で書かれていながら、本論でこの仮説が影をひそめてしまっているのはどうしたことか。ちなみに評者は第一仮説には大筋で同意できるが、第二仮説には限定的にしか同意できない。むしろ全面反論といったほうがいいだろう。三世紀にはたしかにそのような事態を想定可能な場合もあった。しかしだからといって、キリスト教徒を民衆のリンチから保護するための方策が、皇帝のキリスト教「迫害」の実相だった、とまで言い切ってしまうのはいかなものか。少なくとも、常にそうだったと断定するのは評者には憚れる。とりわけ先に述べたように、大迫害期の詳細な論述は「序論」の読者を裏切る諸迫害の事例で満ちている。たしかにここでも、原則からの逸脱は当然の前提とされているので（四五二頁以下）、著者にとつて帝国側の逸脱行為も射程内ということであろうが、どう言おうと逸脱のレベルは超えているように思えてならない。その印象は、著者の恣意的な史料採用が後半になるにしたがつて目立つのと連動しているようだ。それはなぜか。

前述のように本書はこれまでになく浩瀚な諸史料を網羅して紹介している希有の書である。しかし、著者が丁寧で紹介するその多くは、巻末の「付録」を含め短文の碑文やパピルス文書のほうであって、肝心の中心的文書史料（エウセビオスやラクトンティウス、殉教者伝）の場合は、詳細な紹介抜きに著者の視点からの結論のみが提示されることが多く、それらを熟読玩味している読

者でない、置いてきぼりをくらかねない構造となっている。おそらく著者の軽快な論理速度維持のためには、文書史料の論旨を逐一追う鈍行型はテンポに合わないであろう。評者も遅ればせながら狭い意味での迫害史研究から足を洗い、出土遺物との関連でキリスト教の諸事象を見直す方向へと転じた。もとより考古学や碑文学の素養のない身、おのずと限界はあるのだが、文献の背後に拡がる現身の世界を知ることが文献を読み破るために不可欠と考えたためである。保坂氏の研究は、その意味でも評者が目指す方向と共振する面がある。だが逆に、氏の文書史料へのアプローチは、評者からすると、従来の文献史学の作法をえてして「教会側民間伝承」(二六頁。参照、一九七頁七行目)とか「文学的モチーフ」(四二二六頁)の一言で葬りさる傾向が見受けられるように思う。重ねていう。史料批判されていないのではない。むしろ逆で氏の視角にそって徹底的に批判され、その結果、文献史料はその内在論旨とは無関係に、論者の論旨に都合のいい文言のみ提供させられる存在と化している。

本書読了後、評者は『キリスト教の興隆とローマ帝国』(南窓社、一九九四年、以下『興隆』と略記)等で展開してきた拙論の根幹を基本的に改める必要を認めなかった。大迫害勃発期最大の特徴は少なくとも第二仮説にあるとは思えない。エウゼビオス史料が伝えるキリスト教会勢力の増長こそが、国家側の緊急対処、いわば「国策捜査」発動の原因だった、国家権力を刺激した増長の核心は帝位継承問題への介入疑惑というきわめて政治的な問題であった、とする拙論のほうがいまだ明快であると考えるからである。

* * *

残念ながら、周辺部分で苦言を呈さずに書評を終えることはできない。手放して本書を研究初心者の手本に推奨できないからである。この書評の冒頭で「著者はじつにゆき届いた配慮を本書の随所で発揮している」と書いた。その同じ著者が以下列挙するような問題点を放置している。これが歴史畑の評者には理解に苦しむところなのだが、細かい瑕瑾をあげつらうのは本意でない。代表例のみ指摘しておこう。

(一)本書を読んで看過できないひとつが、種々雑多な誤記・脱字のたぐいの多さである。完璧な校正などありえないが、それにしては誤植が目立って多い。その大部分は単純なワープロの打ち込みや漢字変換ミスレベルのものである(初出は二二頁下から九行目「出来事して」と脱字)。目が慣れてしまった著者自身はともかく、これほどの誤植を許してしまつて、編集者は何をしていたのだろうと不審に感じざるをえなかった。再版時にはきつと改善をお願いしたい点である。

(二)上記の単純なレベルは別にして、著者の不用意な思い込みや注意力散漫と思われる誤記も意外に多い。氏の立論への信頼性に疑義を生じさせるのでいただけない。一七二頁冒頭「Cimae」は「Comae」で、のみならず不正確な叙述が続く(大清水裕氏よりのご指摘)。一九五頁註三四「アウレリアヌスは逆に助言者の進言により迫害を踏み留まつたと言われる」(『教会史』第七卷第三〇章第二〇節)となると史実の誤認としか言いようがないし(ここには「迫害を終始させたガリエヌス」という意味不明の表

現もある)、八四頁下から八行目「Christiani ad Iernem」の誤記(参照、六三頁註六〇)、三〇四頁冒頭の「諸民族の糾合」(四七七、四八八頁では「統合」)のような訳の不統一、三八八頁上二行目「大神祇官が以下のような」という訳し落とし。三二二頁上四行もいまだら「鳥々」はないだろう。また、一一〇頁註三九での豊田「碑銘を読む」とか、四三八頁註七八、四七九頁註二を見て、豊田「大迫害前夜」なる論文を探す徒勞に時を費やす読者が出ないことを祈らざるをえない(五九六頁以下を参照するなら「銘文を読む」「大迫害直前・殉教者伝」とでも略称すべきか)。評者の所説への言及においても誤読や理解のズレが散見される。たとえば四二五頁註八。評者は「宮廷内軍人」などと限定して書いた覚えはない。また四三八頁註七六。評者は単にKaiser(凱)を紹介しているだけで、彼の説に同意などしていない(『興隆』一〇二、一三三四頁参照)。「歴史学において正確さは義務である」と教えられてきた身にとつて、この杜撰さは見過ごしがたい。

(三)人名・地名・官職名表記の問題点。これは凡例で原則を示しておけばすむことであろうが、たとえば、二〇二頁末尾の同ジアレクサンドリア聖職者団内で「ディオニシオス」「マキシムス」「ファウストゥス」「エウセビオス」「カイレモン」のギリシア・ラテン語混在表記はいかなる根拠によるのだろうか。二〇八頁でのヌミディア/北アフリカの「リアノスの殉教」(ただし、二〇二、二〇四、二二六頁以下では「リアヌス」)や、エウセビオス『教会史』中の「マリヌスの殉教」には頭をかしげざるをえなかった。その他、二三頁註六、八〇頁註二の「ユリオ・クラウディウス朝」や、八〇頁と一三七頁冒頭の「アリストテレス」

「ローマ賞詞」は、日本語的に聞き慣れない表記だし、三六二頁下から三行目の「二〇万級財務官」、五〇三〜四頁の「都警隊長表」Praefecti Urbis Romaeは、ローマ史プロパーからすると受け入れがたい官職名。さらに、三五五頁註一九九の「ユリアヌス」は皇帝ユリアヌスだけにいただけない。まったくの別人と誤読されても仕方ないだろう。

(四)註番号の付け方で、欧文の作法を持ち込んだと想像されるが、「……である。帝政中期を……」(四七頁上二行目)といった表記は、評者には日本語文体として違和感を覚えるべきであった。そもそも縦書きの日本語を横書きにした場合どうあるべきかは、句読点かブランク・ピリオドかとか、漢数字とアラビア数字の使い分けを含めて、いまだ流動的にしろ、少なくとも註番号は「……である。帝政中期を……」と振ってほしいと思う評者は、頑迷な守旧派なのだろうか。

(五)しばしば本文中の活字のポイントが不意に注記レベルに変更されて、それだけでなくも極限にまで詰め込まれた段組で、視力の落ちた老書生にはつらい作業がさらに倍加された。都合あつてのことなのだろうが、読者に読みやすい版組みを求めるのは、今や過大な要求になってしまったのであろうか。

学界の牽引者には、こういう点でも模範であつてほしいと思う。

* * *

思い返せば、かつて拙著『興隆』が出版された折、秀村欣二先生が我が国における歴史畑でのローマ帝国のキリスト教迫害史研究を概観され、ご自分を井上智勇・半田元夫氏と共に第一世代、

弓削達氏を第二世代に位置づけ、第三世代に松本宣郎氏とともに評者を挙げられたことがあった（『図書新聞』二二二七号、一九四四年一〇月八日）。光榮であると同時にいささか面はゆく、しかし後進への励ましとありがたく拝読したことを思い出す。僭越ながら評者なりに総括し直すなら、第一世代に新田一郎氏を加え、第二世代に松本氏と評者を移動させ、保坂氏で第三世代出現と考えたい。迫害史が研究者を得るのは、テーマ的に信者ないし帰属宗教の延長上で関心ある者、とそれがこれまでの常態であった。そこに研究的な有利さと共に自ずと限界もあった（第二バチカン公会議の余韻漂う時期に受洗した評者はさしずめ鬼子で、新旧の

狭間で呻吟するローマ・カトリック教会および聖職位階制度の功罪を目の当たりにし、その意味で生きた歴史を学ぶという利点には大いに恵まれていたと思うにせよ）。そして今回、そういうしがらみとはまったく無縁の自由人の登場である。斧を置いたのは評者かもしれないが、なぎ倒したのは保坂氏である。氏が斯界の希望の星であることに間違いはない。あれこれ書いたが、それも今後の活躍を大いに期待しているからに他ならない。ご寛恕を乞いつつ、これからいよいよ本番を迎える迫害史研究の未来を言祝ぎたい。

（A5判 六六一頁 二〇〇八年三月 教文館 税込二二六〇〇円）
 （上智大学文学部史学科教授）